

平成29年分 株式等の 譲渡所得等のあらまし

有価証券の譲渡による所得のうち、株式等の譲渡に係るものは、原則として、申告分離課税の方法により課税されます。

ここでは、平成29年分の**申告分離課税の方法による株式等の譲渡所得等の概要**を中心に説明しています。4～43ページの記載例等とともに申告書等の作成の参考としてください。

	(ページ)
I 株式譲渡益課税のあらまし	45
II 取得費(取得価額)	49
III 譲渡所得等の金額及び税額の計算	51
IV 上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除の特例	52
V 特定口座制度	54
VI 国外転出時課税制度の概要	58
VII 株式等に係る譲渡所得等のその他の特例	58
VIII 上場株式等の配当等の課税関係	62

譲渡所得等の申告に当たっての注意点

- 株式等の譲渡所得等に対しては、**地方税(住民税)**もかかります。
なお、所得税及び復興特別所得税の確定申告書を提出した方は、改めて住民税や事業税の申告書を提出する必要はありません(住民税については、58ページ「参考事項2」参照)。
- あなた(株式などをお売りになった方)を控除の対象者として、「**配偶者(特別)控除**」、「**扶養控除**」の適用を受けている方がいる場合には、あなたの一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額によっては、これらの控除の適用が受けられないことがあります。
特に、これらの控除の適用を受けている方が給与所得者の場合は、ご注意ください。
- ここに説明していない事柄や分からないことがありましたら、国税庁ホームページ【www.nta.go.jp】のタックスアンサーをご覧ください。

お知らせ

- 平成25年分から平成49年分まで、東日本大震災からの復興を図るための施策に必要な財源を確保するため、復興特別所得税(原則として各年分の所得税額の2.1%)を所得税と併せて申告・納付することとされています。
また、平成25年1月1日から平成49年12月31日までの間に生ずる所得については、源泉所得税の徴収の際に復興特別所得税が併せて徴収されています。
詳しくは、国税庁ホームページ【www.nta.go.jp】をご覧ください。

I 株式譲渡益課税のあらまし

1 申告分離課税制度のあらまし

一般株式等(47ページ参照)の譲渡による事業所得の金額、譲渡所得の金額及び雑所得の金額(以下「一般株式等に係る譲渡所得等の金額」といいます。)については、他の所得の金額と区分して、一般株式等に係る譲渡所得等の金額の15%に相当する金額の所得税(他に復興特別所得税)が課されます。

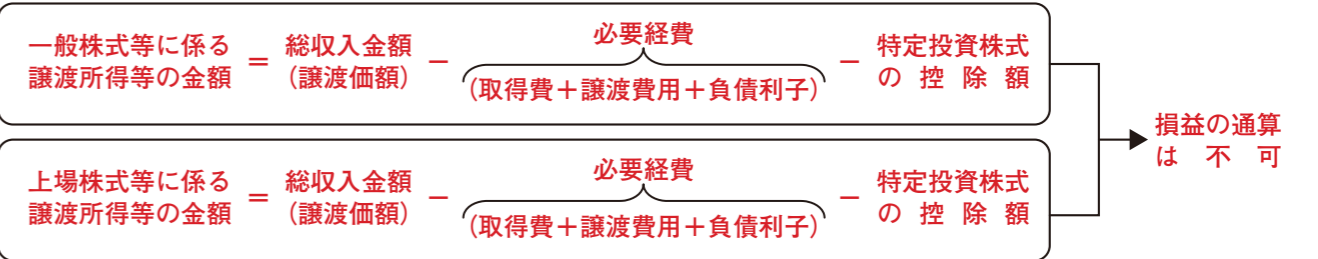
また、上場株式等(46ページ参照)の譲渡による事業所得の金額、譲渡所得の金額及び雑所得の金額(以下「上場株式等に係る譲渡所得等の金額」といいます。)については、他の所得の金額と区分して、上場株式等に係る譲渡所得等の金額の15%に相当する金額の所得税(他に復興特別所得税)が課されます。

営利を目的として継続的に行う株式等(46ページ参照)の譲渡による所得は、事業所得又は雑所得となり、それ以外の株式等の譲渡による所得は、譲渡所得となります。

なお、次の株式等の譲渡による所得は、**譲渡所得**として差し支えありません。

- (1) 上場株式等で所有期間が1年を超えるものの譲渡による所得
- (2) 一般株式等の譲渡による所得

一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額は、所得の区分ごとに次のように計算します。



総収入金額	取得費(取得価額)	○ 譲渡した株式等の取得に要した金額等 ※ 詳しくは、49ページから50ページをご覧ください。
	譲渡に要した費用	○ 相続財産を売却した場合の相続税額の取得費加算の特例 ※ 詳しくは、62ページをご覧ください。
	取得に要した負債の利子	○ 譲渡のために要した委託手数料 ○ 管理費(事業所得又は雑所得に限ります。) ○ その他の経費
	特定投資株式の取得に要した金額の控除	○ 譲渡した株式等の取得のための借入金等の利子で、本年中の所有期間に対応する部分の金額
	一般株式等に係る譲渡所得等の金額又は上場株式等に係る譲渡所得等の金額	○ 特定投資株式を払込みにより取得した場合、その取得に要した金額を一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額の計算上控除することができます(59ページ参照)。 【上場株式等のみ】 ○ 上場株式等に係る譲渡損失の金額がある場合には、その年分の分離課税配当所得等金額と損益通算し、控除しきれない譲渡損失の金額は、翌年以後3年間の各年分の上場株式等に係る譲渡所得等の金額及び分離課税配当所得等金額から控除できます(52ページ参照)。

2 申告分離課税以外の課税方法

株式等の譲渡による所得であっても、その株式等の譲渡が次に掲げる譲渡に該当するときは、それぞれ次に掲げる方法により課税されます。

- (1) 金融商品先物取引等（有価証券の受渡しが行われることとなるものに限ります。）の方法による株式等の譲渡

事業所得又は雑所得として総合課税

注 金融商品先物取引等の決済が差金等決済によるときは、事業所得又は雑所得として分離課税

- (2) 土地等の譲渡に類する株式等の譲渡で、土地等の短期譲渡所得として分離課税の対象とされるもの

土地等の短期譲渡所得として分離課税

- (3) ゴルフ会員権に類する株式又は出資者の持分の譲渡

原則、譲渡所得として総合課税

- (4) 源泉徴収口座（55ページ参照）での上場株式等の譲渡

源泉徴収のみで課税関係が終了（他の所得と合わせて確定申告をすることもできます。）

3 株式等の範囲

- (1) 「株式等」とは、次に掲げるもの（外国法人に係るものを含み、ゴルフ会員権に類する株式又は出資者の持分を除きます。）をいいます。

- ① 株式（投資口を含みます。）、株主又は投資主となる権利、株式の割当てを受ける権利、新株予約権（新投資口予約権を含みます。）及び新株予約権の割当てを受ける権利
- ② 特別の法律により設立された法人の出資者の持分、合名会社、合資会社又は合同会社の社員の持分、協同組合等の組合員又は会員の持分その他法人の出資者の持分（出資者、社員、組合員又は会員となる権利及び出資の割当てを受ける権利を含み、③に掲げるものを除きます。）
- ③ 協同組織金融機関の優先出資に関する法律に規定する優先出資（優先出資者となる権利及び優先出資の割当てを受ける権利を含みます。）及び資産の流動化に関する法律に規定する優先出資（優先出資社員となる権利及び同法に規定する引受権を含みます。）
- ④ 投資信託の受益権
- ⑤ 特定受益証券発行信託の受益権
- ⑥ 社債的受益権
- ⑦ 公社債（預金保険法に規定する長期信用銀行債等並びに農水産業協同組合貯金保険法に規定する農林債及び償還差益について発行時に源泉徴収された割引債を除きます。）

- (2) 「上場株式等」とは、次に掲げるものをいいます。

- ① 金融商品取引所に上場されている株式等
※ 上場されている株式等には、いわゆるETF、J-REIT、ベンチャーファンド及びカントリーファンドを含みます。
- ② 店頭売買登録銘柄として登録されている株式（出資及び投資口を含みます。）
- ③ 店頭転換社債型新株予約権付社債
- ④ 店頭管理銘柄株式（出資及び投資口を含みます。）
- ⑤ 日本銀行出資証券
- ⑥ 外国金融商品市場において売買されている株式等
- ⑦ 投資信託でその設定に係る受益権の募集が一定の公募により行われたもの（特定株式投資信託を除きます。）の受益権
- ⑧ 特定投資法人の投資口
- ⑨ 特定受益証券発行信託（その信託契約の締結時において委託者が取得する受益権の募集が一定の公募により行われたものに限ります。）の受益権
- ⑩ 特定目的信託（その信託契約の締結時において原委託者が取得する社債的受益権の募集が一定の公募により行われたものに限ります。）の社債的受益権
- ⑪ 国債及び地方債

- ⑫ 外国又はその地方公共団体が発行し、又は保証する債券
- ⑬ 会社以外の法人が特別の法律により発行する債券（外国法人に係るもの並びに投資法人債、短期投資法人債、特定社債及び特定短期社債を除きます。）
- ⑭ 公社債でその発行の際の有価証券の募集が一定の公募により行われたもの
- ⑮ 社債のうち、その発行の日前9月以内（外国法人にあっては、12月以内）に有価証券報告書等を内閣総理大臣に提出している法人が発行するもの
- ⑯ 金融商品取引所（これに類するもので、外国の法令に基づき設立されたものを含みます。）においてその金融商品取引所の規則に基づき公表された公社債情報（一定の期間内に発行する公社債の種類及び総額、その公社債の発行者の財務状況及び事業の内容その他その公社債及びその発行者に関して明らかにされるべき基本的な情報をいいます。）に基づき発行する公社債で、その発行の際に作成される目論見書に、その公社債がその公社債情報に基づき発行されるものである旨の記載のあるもの
- ⑰ 国外において発行された公社債で、次に掲げるもの
 - a 有価証券の売出し（その売付け勧誘等が一定の場合に該当するものに限ります。）に応じて取得した公社債（bにおいて「売出し公社債」といいます。）で、その取得の時から引き続きその有価証券の売出しをした金融商品取引業者等の営業所において保管の委託がされているもの
 - b 売付け勧誘等に応じて取得した公社債（売出し公社債を除きます。）で、その取得の日前9月以内（外国法人にあっては、12月以内）に有価証券報告書等を提出している会社が発行したもの（その取得の時から引き続きその売付け勧誘等をした金融商品取引業者等の営業所において保管の委託がされているものに限ります。）
- ⑱ 外国法人が発行し、又は保証する債券で一定のもの
- ⑲ 銀行業若しくは第一種金融商品取引業を行う者若しくは外国の法令に準拠してその国において銀行業若しくは金融商品取引業を行う法人（以下「銀行等」といいます。）又はその銀行等の関連会社として一定の者が発行した社債（その取得をした者が実質的に多数でない社債として一定のものを除きます。）
- ⑳ 平成27年12月31日以前に発行された公社債（その発行の時に同族会社に該当する会社が発行したものを除きます。）

- (3) 「一般株式等」とは、上場株式等以外の株式等をいいます。

4 株式等に係る譲渡所得等のみなし譲渡課税の範囲（主なもの）

- (1) 一般株式等に係る譲渡所得等に係る収入金額には、一般株式等につき交付を受ける次に掲げる金額も含まれます。

- ① 法人の株主等がその法人の合併（合併法人の株式又は出資以外の資産が交付されなかった場合など一定の場合を除きます。）等により交付を受ける金銭の額及び金銭以外の資産の価額の合計額（配当等の額とみなされる部分の金額を除きます。）
- ② 公社債の元本の償還（買入れの方法による償還を含みます。）により交付を受ける金銭の額及び金銭以外の資産の価額（特定公社債（上記3(2)の①、③、⑥又は⑪から⑳までに掲げる公社債をいいます。）以外の公社債の償還により交付を受ける金銭又は金銭以外の資産で、その償還の日において同族会社からその株主などが交付を受けるものの価額を除きます。）の合計額
- ③ 分離利子公社債に係る利子として交付を受ける金銭の額及び金銭以外の資産の価額の合計額
- ④ 投資信託等の終了又は一部の解約により交付を受ける金銭の額及び金銭以外の資産の価額の合計額のうち、その投資信託等について信託されている金額に達するまでの金額

- (2) 上場株式等に係る譲渡所得等に係る収入金額には、上場株式等につき交付を受ける次に掲げる金額も含まれます。

- ① 上記(1)の①から③までに掲げる金額
- ② 投資信託等の終了又は一部の解約により交付を受ける金銭の額及び金銭以外の資産の価額の合計額

5 株式等に係る譲渡所得等における各種特例の適用に当たって使用する申告書等の種類

区分	特例						申告の際に必要な書類								
	エンジェル控除(※2)の特例	上場株式等の損益通算及び繰越控除			特定投資株式の損益の計算及び繰越控除			申告書B第二表、第三表	申告書付表(※3)	計算明細書					
		前年からの繰越損失の金額	分離課税配当所得等金額との損益通算	翌年への繰越損失の金額	前年からの繰越損失の金額	上場株式等に係る譲渡所得等の金額との損益の計算	翌年への繰越損失の金額			計算明細書(※4)	エンジェル控除の明細書(※5)	株式の異動明細書(※6)			
株式(特定投資株式(※1)以外)	譲渡益	なし	なし	/	/	/	○	—	③	—	—				
			あり				○	①	③	—	—				
		あり	なし				○	—	③	○	—				
			あり				○	①	③	○	—				
	譲渡損	なし	なし				なし	(申告不要)			○	①	③	—	—
			あり				あり	○	①	③	—	—			
特定投資株式(エンジェル株式)	譲渡益	なし	なし	なし	○	—	④	—	○						
			あり	あり	○	②	④	—	○						
		あり	なし	なし	○	—	④	○	○						
			あり	あり	○	②	④	○	○						
	譲渡損	なし	あり	あり	○	②	④	—	○						
			あり	あり	○	②	④	—	○						
譲渡事実はないが、翌年以後に繰越控除の特例を受けようとする場合							○	①又は②	—	—	—				

- (注1) 同一年中に特定投資株式以外の株式と特定投資株式の両方を譲渡した場合には、特定投資株式における書類を使用します。
- (注2) 上記以外の場合については、税務署にお尋ねください。
- ※1 60ページの「参考事項3」を参照してください。
- ※2 59ページの「Ⅶ 株式等に係る譲渡所得等のその他の特例」3(1)をいいます。
- ※3 表中の①は、「確定申告書付表(上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除用)」を表します。また②は、「確定申告書付表(特定投資株式に係る譲渡損失の損益の計算及び繰越控除用)」を表します。
- ※4 表中の③は、「株式等に係る譲渡所得等の金額の計算明細書」を表します。また④は、「株式等に係る譲渡所得等の金額の計算明細書(特定権利行使株式分及び特定投資株式分がある場合)」を表します。
- ※5 「エンジェル控除の明細書」とは、「特定(新規)中小会社が発行した株式の取得に要した金額の控除の明細書」をいいます。この明細書は、59ページの「Ⅶ 株式等に係る譲渡所得等のその他の特例」3(1)の特例を受ける場合に必要になります。
- ※6 「株式の異動明細書」は、59ページの「Ⅶ 株式等に係る譲渡所得等のその他の特例」3のいわゆるエンジェル税制の特例を受ける場合に必要となります。

Ⅱ 取得費(取得価額)

1 株式等の取得費(取得価額)【原則】

株式等の取得費は、原則として、次に掲げる区分に応じ、それぞれ次に掲げる金額です。

区分	取得費(取得価額)	
イ	金銭の払込みにより取得した株式等(ハに該当するものを除きます。)	その払い込んだ金銭の額(その金銭の払込みによる取得のために要した費用の額を加算した金額)
ロ	特定譲渡制限付株式又は承継譲渡制限付株式	その譲渡についての制限が解除された日における価額
ハ	発行法人から与えられた次に掲げる権利の行使により取得した株式等(特定権利行使株式を除きます。)	その権利の行使の日における価額
	① 平成13年法律第79号による改正前の商法に規定する株式譲渡請求権	
	② 平成13年法律第128号による改正前の商法に規定する新株の引受権	
	③ 改正前の商法に規定する新株予約権	
	④ 会社法第238条第2項の決議等に基づき交付された新株予約権(新株予約権を引き受ける者に特に有利な条件、金額であるとされるもの又は役務の提供による対価であるとされるものに限り。)	
⑤ 株式と引換えに払い込むべき金額が有利な場合におけるその株式を取得する権利(①から④に該当するものを除きます。)	その権利に基づく払込み又は給付の期日における価額	
ニ	発行法人の株主等として与えられた新たな払込みや給付を要しないで取得した株式又は新株予約権	零
ホ	購入した株式等(ハに該当するものを除きます。)	その購入の代価(購入手数料、その他その株式等の購入のために要した費用がある場合には、その費用の額を加算した金額)
ヘ	イからホ以外の方法により取得した株式等	その取得の時にその株式等の取得のために通常要する価額

2 株式等の取得費(取得価額)【その他】

- (1) 相続(限定承認に係るものを除きます。)、遺贈(包括遺贈のうち限定承認に係るものを除きます。)
- 又は贈与により取得した株式等の取得費(取得価額)は、被相続人又は贈与者の取得費(取得価額)を引き継ぎます。

なお、相続や贈与などの際に相続人や受贈者が支払った名義書換手数料などの金額も取得費(取得価額)に含まれます(下記(6)を適用する場合を除きます。)

- (2) 株主割当てにより旧株に対して割り当てられた新株を取得した場合(金銭の払込みを要する場に限り。)
- において、その株主割当て後の旧株と新株の1株当たりの取得費(取得価額)は、次の算式で計算します。

$$\frac{\left(\begin{array}{l} \text{旧株1株の従前} \\ \text{の取得費等} \end{array} \right) + \left(\begin{array}{l} \text{新株1株当た} \\ \text{りの払込金額} \end{array} \right) \times \left(\begin{array}{l} \text{旧株1株当た} \\ \text{りの新株数} \end{array} \right)}{\text{旧株1株当たりの新株数} + 1} = \left(\begin{array}{l} \text{株主割当て後の旧株} \\ \text{及び新株の取得費等} \end{array} \right)$$

- (3) 信用取引又は発行日取引の方法による株式の売買を行った場合の売付けに係る株式の取得価額として事業所得又は雑所得の必要経費に算入する金額は、その株式の買付けに要した金額です。

- (4) 昭和27年12月31日以前に取得した株式等について譲渡所得の金額の計算をする場合の取得費は、原則として、**同月中の公表最終価格等**を基として計算します。
- (5) **特定権利行使株式(60ページ「参考事項3」参照)**については、取得費(取得価額)の計算方法などが異なりますので、税務署にお尋ねください。
- (6) 株式等の取得費(取得価額)の金額が、その譲渡に係る収入金額の5%相当額に満たない場合には、その5%相当額を取得費(取得価額)の金額とすることができます。

3 2回以上にわたって取得した同一銘柄の株式等を譲渡した場合の株式等の取得費

その株式等を取得した時(その後既にその株式等の一部を譲渡している場合には、直前の譲渡の時)から譲渡の時までの期間を基礎として、取得した時(又は直前の譲渡の時)において有していた株式等及びその期間内に取得した株式等について**総平均法に準ずる方法**によって算出した1単位当たりの金額を基として計算します。

総平均法に準ずる方法の計算については、次の設例をご覧ください。

設例

次の例を基に、平成29年10月3日に譲渡した株式3,000株の、譲渡所得の取得費を計算します。

取引例

(取引年月日等)	(株数)	(単価)	(入金)	(出金)
①平成27年11月10日 取得	3,000株	156円		468,000円
②平成28年1月7日 譲渡	2,000株	180円	360,000円	
③平成28年2月10日 取得	4,000株	170円		680,000円
④平成29年10月3日 譲渡	3,000株	150円	450,000円	

イ まず、平成28年1月7日の譲渡後(直前の譲渡後)の残株式1,000株の取得に要した金額を計算します。

$$\frac{\text{平成27年11月取得} \quad 468,000\text{円}}{3,000\text{株}} \times \text{平成28年1月譲渡後の株式} \quad 1,000\text{株} = \underline{156,000\text{円}}$$

ロ 次に、平成29年10月3日に譲渡した株式3,000株の取得費を計算します。

$$\frac{\text{平成28年1月残株式} \quad 156,000\text{円} + \text{平成28年2月取得株式} \quad 680,000\text{円}}{1,000\text{株} + 4,000\text{株}} = \underline{168\text{円}} \quad \text{【1円未満切り上げ】}$$

$$168\text{円} \times 3,000\text{株} = \underline{504,000\text{円}}$$

① 平成27年11月10日に取得した 3,000株の取得に要した金額 468,000円
--

② 平成28年1月7日に譲渡した 2,000株の取得費 312,000円
残株式 1,000株の取得に要した金額 156,000円

③ 平成28年2月10日に取得した 4,000株の取得に要した金額 680,000円
残株式 1,000株の取得に要した金額 156,000円

④ 平成29年10月3日に譲渡した 3,000株の取得費 504,000円
残株式 2,000株の取得に要した金額 336,000円

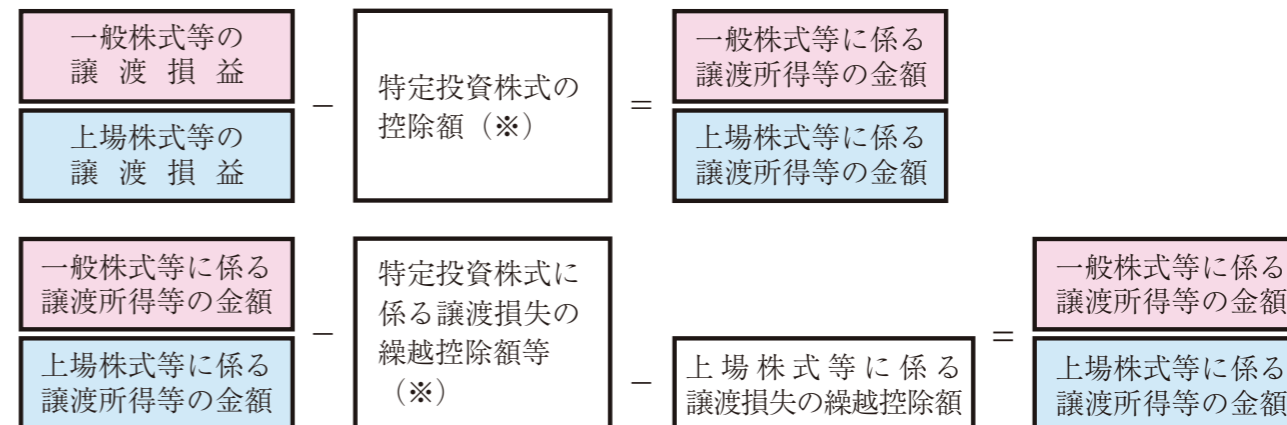
$$168\text{円} \times 2,000\text{株} = \underline{336,000\text{円}}$$

注) 売買委託手数料やそれに係る消費税及び地方消費税も取得費(取得価額)に算入されますが、上記の計算例では、便宜上、これらの金額を含めないで計算しています。

Ⅲ 譲渡所得等の金額及び税額の計算

1 一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額の計算

一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額は、次のように計算します。



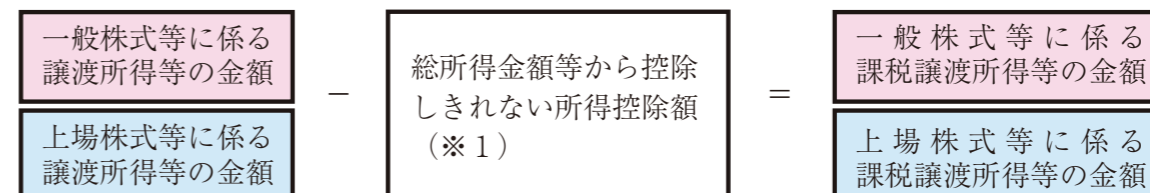
※ 控除額及び繰越控除額は、一般株式等、上場株式等の順に控除します。

注) 一般株式等に係る譲渡所得等の赤字の金額は、他の一般株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額から、上場株式等に係る譲渡所得等の赤字の金額は、他の上場株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額から控除できますが、原則として一般株式等に係る譲渡所得等の赤字の金額は、上場株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額から、上場株式等に係る譲渡所得等の赤字の金額は、一般株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額から控除することはできません。

また、その控除をしてもなお控除しきれない赤字の金額は、給与所得など他の各種所得(分離課税配当所得等を除きます。)の黒字の金額から差し引くことはできません。

逆に、不動産所得など他の各種所得に赤字の金額がある場合においても、その各種所得の赤字の金額は、一般株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額から差し引くことはできません。

2 税額の計算



$$\text{一般株式等に係る課税譲渡所得等の金額} \times \text{所得税15\% (他に住民税5\%)} = \text{所得税額(※2) (住民税額)}$$

$$\text{上場株式等に係る課税譲渡所得等の金額} \times \text{所得税15\% (他に住民税5\%)} = \text{所得税額(※2) (住民税額)}$$

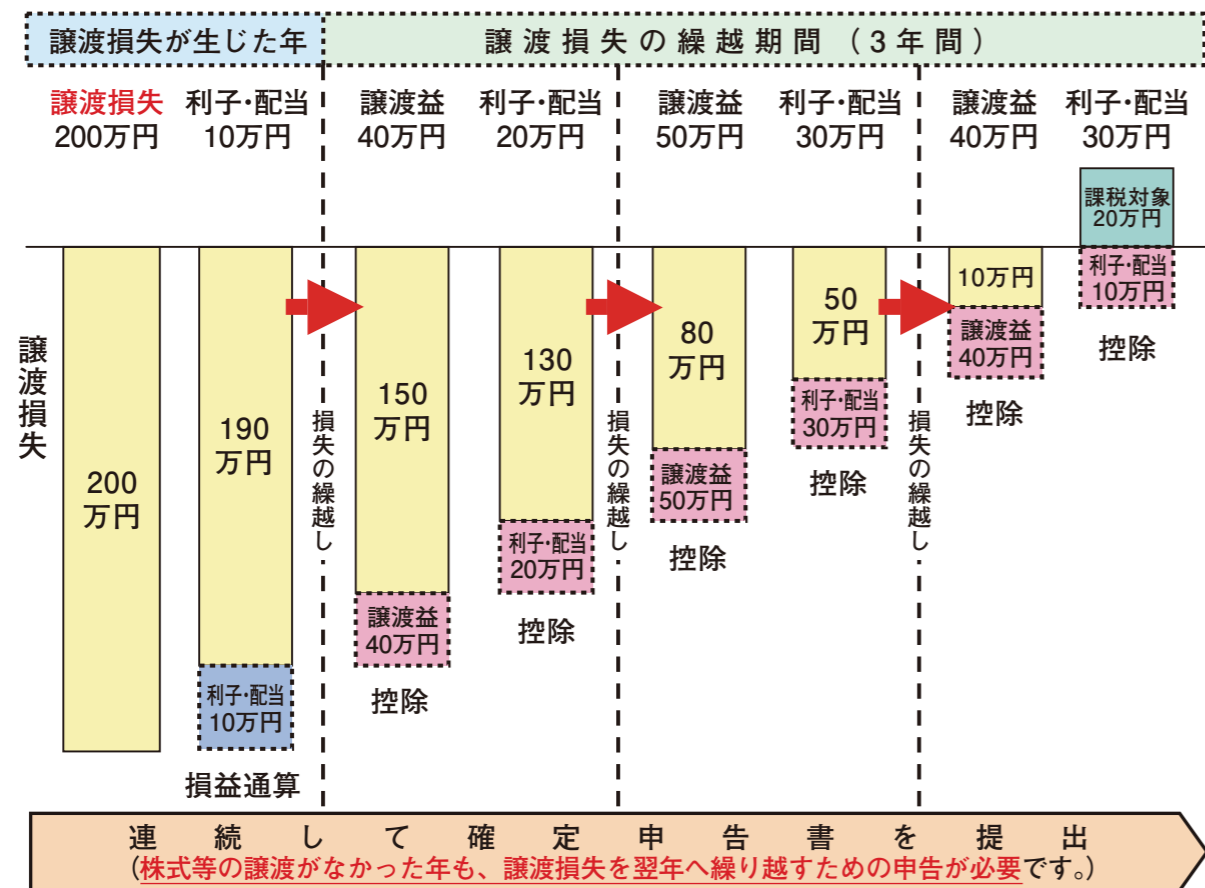
※1 総所得金額等から控除しきれない雑損控除、医療費控除、配偶者控除、基礎控除などの所得控除の金額がある場合には、その控除しきれない金額を一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額から控除します。

所得控除の金額は、一般株式等に係る譲渡所得等の金額、上場株式等に係る譲渡所得等の金額から順次控除します(ただし、これと異なる順序で控除しても差し支えありません。)

※2 所得税のほかに、復興特別所得税が課されます。

Ⅳ 上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除の特例

1 概要



2 内容

平成28年分以後の各年分において上場株式等を金融商品取引業者等を通じて譲渡（下記(1)参照）したことにより生じた譲渡損失の金額は、確定申告により、その年分の上場株式等に係る配当所得等の金額（下記(2)参照）と損益通算することができます。

また、損益通算してもなお控除しきれない譲渡損失の金額については、翌年以後3年間にわたり、確定申告により上場株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る配当所得等の金額から繰越控除することができます。

(注1) 平成27年分以前の各年分において生じた上場株式等に係る譲渡損失の金額で平成28年分以後に繰り越されたものについても、平成28年分以後における上場株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る配当所得等の金額から繰越控除することができます。

(注2) 上場株式等に係る譲渡損失の金額を一般株式等に係る譲渡所得等の金額から控除することはできません。また、平成27年分以前の各年分において生じた上場株式等に係る譲渡損失の金額で平成28年分以後に繰り越されたものについても、一般株式等に係る譲渡所得等の金額から繰越控除することはできません。

(注3) 次の(1)の①から⑩以外の方法による上場株式等の譲渡（いわゆる相対取引による上場株式等の譲渡）により生じた譲渡損失については、損益通算及び繰越控除はできません。

(注4) 非課税口座（NISA口座）及び未成年者口座（ジュニアNISA口座）内の上場株式等を譲渡したことにより生じた譲渡損失については、損益通算及び繰越控除はできません。

(1) 上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除の特例の対象となる譲渡の範囲

上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除の特例の対象となる譲渡（金融商品取引業者等を通じた譲渡）は、次の方法による上場株式等の譲渡をいいます。

① 金融商品取引業者（第一種金融商品取引業を行う者に限ります。）又は登録金融機関への売委託により行う譲渡

- ② 金融商品取引業者に対する譲渡
- ③ 登録金融機関又は投資信託委託会社に対する譲渡で一定のもの
- ④ 法人の合併などによりみなし譲渡課税の対象となるもの（47ページの4(2)参照）
- ⑤ 上場株式等を発行した法人の行う株式交換又は株式移転による株式交換完全親法人又は株式移転完全親法人に対する譲渡
- ⑥ 上場株式等を発行した法人に対して会社法の規定に基づいて行う単元未満株式の譲渡
- ⑦ 新株予約権付社債についての社債、取得条項付新株予約権又は新株予約権付社債の発行人に対する譲渡で一定のもの及び取得条項付新投資口予約権の発行人に対する譲渡
- ⑧ 上場株式等を発行した法人に対して改正前の商法の規定に基づいて行う端株の譲渡
- ⑨ 上場株式等を発行した法人が行う会社法第234条第1項の規定等による一株又は一口に満たない端数に係る上場株式等の競売その他一定の譲渡
- ⑩ 信託会社（信託業務を営む金融機関を含みます。）の国内にある営業所に信託されている上場株式等の譲渡で、その営業所を通じて、外国証券業者への売委託により行うもの又は外国証券業者に対して行うもの
- ⑪ 国外転出時課税制度（58ページ参照）により譲渡があったものとみなされるもの

(2) 上場株式等に係る譲渡損失の金額と上場株式等に係る配当所得等の金額の損益通算の方法

その年分の上場株式等に係る譲渡損失の金額は、上場株式等に係る配当所得等の金額を限度として、その年分の上場株式等に係る配当所得等の金額の計算上控除します。

なお、上場株式等に係る配当所得等の金額とは、上場株式等の配当等^(注)に係る利子所得の金額及び配当所得の金額（上場株式等の配当等に係る配当所得については、申告分離課税を選択したものに限り、）の合計額をいいます。

(注) 「上場株式等の配当等」とは、特定公社債（47ページの4(1)の②参照）の利子、公募公社債投資信託の収益の分配、上場株式の配当、公募株式投資信託の収益の分配などをいい、大口株主等^(注)が支払を受けるものを除きます。

※ 「大口株主等」とは、その株式等の保有割合が発行済株式等の総数等の3%以上である株式又は出資を有する者をいいます。

(3) 上場株式等に係る譲渡損失の金額の繰越控除の方法

① 上場株式等に係る譲渡損失の金額が前年以前3年内の二以上の年に生じたものである場合には、これらの年のうち最も古い年に生じた上場株式等に係る譲渡損失の金額から順次控除します。

② 前年以前3年内の一の年において生じた上場株式等に係る譲渡損失の金額を控除する場合において、その年分の「上場株式等に係る譲渡所得等の金額」及び「上場株式等に係る配当所得等の金額」があるときは、まずその「上場株式等に係る譲渡所得等の金額」から控除し、なお控除しきれない譲渡損失の金額をその「上場株式等に係る配当所得等の金額」から控除します。

※ 「上場株式等に係る配当所得等の金額」については、上記(2)の適用がある場合は、これを適用した後の金額になります。

(4) 所得税の扶養控除の対象となる扶養親族に該当するかどうかなどを判定する際の「合計所得金額」は、配当所得等との損益通算の適用後の金額であり繰越控除の適用前の金額となります。

3 手続

それぞれの特例の適用を受けるためには、次の手続が必要になります。源泉徴収口座（55ページ参照）の譲渡損失の金額を申告する場合も同じです。

(1) 上場株式等に係る譲渡損失と上場株式等に係る配当所得等との損益通算

① この損益通算の規定の適用を受けようとする年分の確定申告書に、この規定の適用を受けようとする旨を記載します（【事例4】28ページの「特例適用条文」を参照）。

② 上記①の年分の所得税及び復興特別所得税につき、その上場株式等に係る譲渡損失の金額の計算に関する明細書（※）の添付がある確定申告書を提出します。なお、控除しきれない譲渡損失の金額があり、翌年以後にその譲渡損失の金額を繰り越す場合には、次の(2)の手続が必要になります。

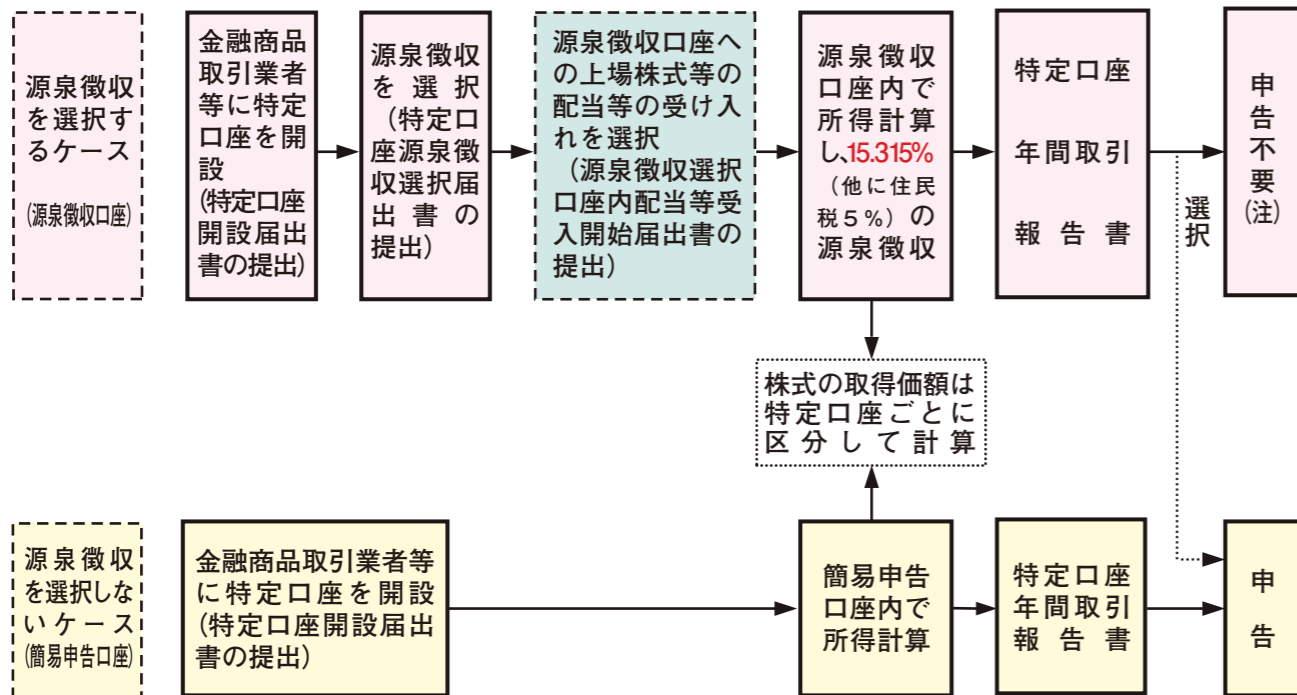
(2) 上場株式等に係る譲渡損失の繰越控除

- ① 上場株式等に係る譲渡損失の金額が生じた年分の所得税及び復興特別所得税につき、その上場株式等に係る譲渡損失の金額の計算に関する明細書（※）の添付がある確定申告書を提出します。
- ② 上場株式等に係る譲渡損失の金額が生じた年分の後の年において連続して確定申告書を提出します（上場株式等に係る譲渡損失の金額が生じた年分の後の年に株式等の譲渡がない場合でも、その年の翌年以後にこの上場株式等に係る譲渡損失の繰越控除の適用を受けようとする場合は、確定申告書に「所得税及び復興特別所得税の確定申告書付表（上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除用）」を添付する必要があります。）。
- ③ この繰越控除の適用を受けようとする年分の確定申告書に、この繰越控除を受ける金額の計算に関する明細書（※）を添付します。

※ 「株式等に係る譲渡所得等の金額の計算明細書」、「所得税及び復興特別所得税の確定申告書付表（上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除用）」

V 特定口座制度

1 概要図



注) 源泉徴収口座の譲渡損失の金額を、その源泉徴収口座以外の上場株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額と相殺する場合、又は上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除の特例の適用を受ける場合などには、確定申告が必要です。

2 内容

(1) 特定口座制度の概要

金融商品取引業者等に特定口座を開設して取引をした場合においてその特定口座に係る振替口座簿に記載若しくは記録がされ、又はその特定口座に保管の委託がされている上場株式等を譲渡した場合には、それぞれの**特定口座ごとに、その特定口座に係る特定口座内保管上場株式等の譲渡による譲渡所得等の金額と、それ以外の株式等の譲渡所得等の金額とを区分して計算します。**

また、その特定口座内の譲渡所得等の金額の計算は金融商品取引業者等が行い、年間の取引の合計を記載した「特定口座年間取引報告書」が、取引を行った年の翌年1月31日までに金融商品取引業者等から交付されます（56ページ「参考事項1」参照）。

(2) 特定口座に受け入れることができる主な上場株式等（特定口座内保管上場株式等）

- ① 特定口座の開設後にその金融商品取引業者等への買付けの委託（買付けの委託の媒介、取次ぎ又は代理を含みます。）により取得をした上場株式等又はその金融商品取引業者等から取得をした上場株式等で、その取得後直ちに特定口座に受け入れるもの
- ② 他の金融商品取引業者等に開設されている特定口座から移管される上場株式等
- ③ その特定口座を開設する金融商品取引業者等が行う上場株式等の募集により取得した上場株式等又はその金融商品取引業者等が行う有価証券の売出しに応じて取得した上場株式等
- ④ 贈与、相続又は遺贈により取得した上場株式等で、同一の金融商品取引業者等に開設された被相続人等の特定口座、非課税口座若しくは未成年者口座又は特定口座以外の口座（非課税口座及び未成年者口座を除きます。以下「相続等一般口座」といいます。）から移管により受け入れる一定のもの
- ⑤ 贈与、相続又は遺贈により取得した上場株式等で、異なる金融商品取引業者等に開設された被相続人等の特定口座又は相続等一般口座から移管により受け入れる一定のもの
- ⑥ 特定口座内保管上場株式等につき株式の分割・併合、会社法に規定する株式無償割当て、法人の合併・分割、法人の行った株式分配、株式交換、株式移転又は投資信託の併合により取得する一定の上場株式等で、特定口座への受入れを振替口座簿に記載若しくは記録をし、又は保管の委託をする方法により行うもの
- ⑦ 特定口座内保管上場株式等につき所得税法第57条の4第3項に規定する取得請求権付株式の請求権の行使、取得条項付株式の取得事由の発生、全部取得条項付種類株式の取得決議又は取得条項付新株予約権が付された新株予約権付社債の取得事由の発生により取得する上場株式等で、特定口座への受入れを振替口座簿に記載若しくは記録をし、又は保管の委託をする方法により行うもの
- ⑧ 特定口座内保管上場株式等に付された新株予約権又は特定口座内保管上場株式等について与えられた新株予約権等の行使等により取得する上場株式等で、特定口座への受入れを振替口座簿に記載若しくは記録をし、又は保管の委託をする方法により行うもの
- ⑨ 持株会契約等に基づき取得した上場株式等で、特定口座への受入れをその持株会契約等に基づき開設された持株会等口座から特定口座への振替の方法により行うもの
- ⑩ 上場株式等以外の株式等を発行した法人の合併・分割、法人の行った株式分配、株式交換又は株式移転により取得する一定の株式等でその全てを、その合併・分割、株式分配、株式交換又は株式移転の日に特定口座への受け入れを振替口座簿に記載若しくは記録をし、又は保管の委託をする方法により行うもの

(3) 源泉徴収を行う特定口座（源泉徴収口座）【申告不要制度】

「特定口座源泉徴収選択届出書」の提出がされた特定口座（源泉徴収口座）においては、上場株式等の譲渡の都度、年初からの純利益を計算し、その年における前回の譲渡までの純利益の額を超える部分の金額（源泉徴収選択口座内調整所得金額）が生じた場合には、その譲渡の対価の支払をする際に、その源泉徴収選択口座内調整所得金額に**所得税及び復興特別所得税15.315%（他に住民税5%）の税率**を乗じて計算した金額が金融商品取引業者等により源泉徴収され、納税が完了しますので、確定申告をする必要はありません。また、金融商品取引業者等を通じて支払を受ける上場株式等の配当等については、その金融商品取引業者等に開設している源泉徴収口座に受け入れることができ、上場株式等の配当等を受け入れた源泉徴収口座内に上場株式等を譲渡したことにより生じた譲渡損失の金額があるときは、上場株式等の配当等の額の総額からその上場株式等を譲渡したことにより生じた譲渡損失の金額を控除（損益通算）した金額をもとに金融商品取引業者等により源泉徴収され納税が完了しますので、確定申告をする必要はありません。これらの場合、「配偶者控除」、「扶養控除」などを判定する際の「合計所得金額」は、源泉徴収口座の所得を含めずに判定します。

ただし、源泉徴収口座の譲渡所得等の金額が赤字となった場合（上場株式等の配当等を受けられている場合においてその上場株式等の配当等との通算後）で、その赤字を当該源泉徴収口座以外の上場株式等に係る譲渡所得等の黒字の金額と相殺するとき、又は「上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除」の特例（52ページ参照）の適用を受けるときなどには、確定申告をする必要があります。これらの場合には、57ページ【注意】をご確認ください。

(注) 年初からの譲渡の純利益を計算した結果、その年における前回の譲渡までの純利益の額に満たないこととなった場合には、その都度、その満たない金額に所得税及び復興特別所得税15.315%（他に住民税5%）を乗じて計算した金額に相当する所得税及び復興特別所得税が金融商品取引業者等から還付されます。ただし、上場株式等に係る譲渡損失の金額と上場株式等の配当等の額の総額との損益通算は、年末時点で譲渡損益が確定した後に行われます。

3 手続

- 源泉徴収を選択する場合には、その年の最初の譲渡の時までに、金融商品取引業者等に対して、「特定口座源泉徴収選択届出書」を提出する必要があります。また、その選択は年単位となりますので、**年の途中で源泉徴収を行わないように変更することはできません。**
 - 源泉徴収口座に上場株式等の配当等を受け入れる場合には、その口座に受入れをしようとする上場株式等の配当等の支払の確定する日までに、金融商品取引業者等に対して、「源泉徴収選択口座内配当等受入開始届出書」を提出する必要があります。また、その受入れは「源泉徴収選択口座内配当等受入終了届出書」を提出するまで継続されます。
 - 確定申告書を提出する場合において、「特定口座における上場株式等に係る譲渡所得等の金額」と「その特定口座以外における上場株式等に係る譲渡所得等の金額」との合計は、「**株式等に係る譲渡所得等の金額の計算明細書**」により行います。
 - 確定申告書を提出する場合において、その年中に一の特定口座以外に申告すべきものがない場合には、「特定口座年間取引報告書」の添付をもって「**株式等に係る譲渡所得等の金額の計算明細書**」の添付に代えることができます。
- (注) **源泉徴収口座を申告する場合には、「特定口座年間取引報告書」を確定申告書に添付する必要があります。**

参考事項 1

e-Tax（国税電子申告・納税システム）を利用して確定申告をする場合における「特定口座年間取引報告書」の提出について

- 所得税及び復興特別所得税の確定申告を**e-Tax**で行う場合、「特定口座年間取引報告書」は、その記載内容を入力して送信することにより、その提出を省略することができます。
 なお、**e-Tax**の利用に際しては、電子証明書の取得、ICカードリーダーの購入などの事前準備が必要です。この電子証明書は、社会保障・番号制度の導入に伴い、平成28年1月以降に交付が開始された「マイナンバーカード」に格納されます。
 (注) 提出を省略した「特定口座年間取引報告書」については、法定申告期限から5年間、税務署から提示又は提出を求められることがありますので、自宅等で保存しておく必要があります。
- 金融商品取引業者等から「特定口座年間取引報告書」を書面に代えて電磁的方法により提供を受けた場合^{注1)}に、その電磁的方法で提供された「特定口座年間取引報告書」が金融商品取引業者等の電子署名を付した一定のXML形式のものであれば、**e-Tax**を利用して送信することができます^{注2)}。
 (注1) 「特定口座年間取引報告書」が電磁的方法により提供されているときであっても金融商品取引業者等に「特定口座年間取引報告書」の交付を請求すれば、金融商品取引業者等は書面による「特定口座年間取引報告書」の交付をしなければならないこととされています。
 (注2) 平成28年分以降の所得税及び復興特別所得税の確定申告を**e-Tax**で行う場合、一定の添付書類についてはイメージデータ（PDF形式）により提出することができますが、「特定口座年間取引報告書」などの①記載内容を入力して送信することにより提出を省略することができる添付書類や②電子データ（XML形式）により提出することができる添付書類については、イメージデータ（PDF形式）により提出することができませんので、ご注意ください。

【注意】

源泉徴収口座の譲渡所得等の金額又はその源泉徴収口座の配当所得等の金額の申告に当たっては、次の点に注意してください。

- 源泉徴収口座の譲渡所得等の金額又はその源泉徴収口座の配当所得等の金額を申告するかどうかは**口座ごとに選択**できます（1回の譲渡ごと、1回に支払を受ける上場株式等の配当等ごとの選択はできません。）。
- 源泉徴収口座の譲渡所得等の黒字の金額とその源泉徴収口座の配当所得等の金額のいずれかのみを申告することもできます。ただし、**源泉徴収口座の譲渡損失の金額を申告する場合には、その源泉徴収口座の配当所得等の金額も併せて申告しなければなりません。**
- 源泉徴収口座の譲渡所得等の金額又は配当所得等の金額を申告した後に、その譲渡所得等の金額又は配当所得等の金額を申告しないこととする変更はできません。また、源泉徴収口座の譲渡所得等の金額又は配当所得等の金額を含めないで申告した後に、その譲渡所得等の金額又は配当所得等の金額を申告することとする変更もできません。

【参考】源泉徴収口座を申告する場合の転記方法

特定口座年間取引報告書

源泉徴収税額 (所得税)		株式等譲渡所得割額 (住民税)		外国所得税の額	
千円	円	千円	円	千円	円
譲渡区分	譲渡の対価の額 (収入金額)	取得費及び譲渡に要した費用の額等	差引金額 (譲渡所得等の金額) (①-②)		
上場区分					
特定信用区分					
合計					

源泉徴収税額 (所得税)		配当割額 (住民税)		特別分配金の額		外国所得税の額	
千円	円	千円	円	千円	円	千円	円
種類	配当等の額	源泉徴収税額 (所得税)	配当割額 (住民税)	特別分配金の額	外国所得税の額		
特定上場株式等の配当等							
④株式、出資又は基金							
⑤特定株式投資信託							
⑥投資信託又は特定受益証券発行信託 (⑤、⑦及び⑧以外)							
⑦オープン型証券投資信託							
⑧国外株式又は国外投資信託等							
⑨合計 (④+⑤+⑥+⑦+⑧)							
上記以外のもの							
⑩公社債							
⑪社債的受益権							
⑫投資信託又は特定受益証券発行信託 (⑬及び⑭以外)							
⑬オープン型証券投資信託							
⑭国外公社債等又は国外投資信託等							
⑮合計 (⑩+⑪+⑫+⑬+⑭)							
⑯譲渡損失の金額							
⑰差引金額 (⑨+⑮-⑯)							
⑱納付税額							
⑲還付税額 (⑨+⑮-⑱)							

金融商品取引業者等 所在地 名称 (電話) 法人番号

計算明細書 2面 (上部)

譲渡の対価の額 (収入金額)	取得費及び譲渡に要した費用の額等	差引金額 (譲渡所得等の金額)	源泉徴収税額
円	円	円	円

申告書第一表 (右下部)

配偶者の合計所得金額 (49)	
専従者給与(控除)額の合計額 (50)	
青色申告特別控除額 (51)	
新制度一般所得等の所得税及び復興特別所得税の源泉徴収税額の合計額 (52)	
未納付の所得税及び復興特別所得税の源泉徴収税額 (53)	
本荘分差引引当繰越損失額 (54)	

申告書第二表 (左上部)

所得の内訳 (所得税及び復興特別所得税の源泉徴収税額)

所得の種類	種目・所得の生ずる場所又は給与などの支払者の氏名・名称	収入金額	所得税及び復興特別所得税の源泉徴収税額
株式等の譲渡	<input type="radio"/> 証券 <input type="radio"/> 支店		
利子・配当	株式等の利子・配当 <input type="radio"/> 証券 <input type="radio"/> 支店		

申告分離課税を選択した配当所得については、その「配当」の文字を「○」で囲んでください。(27ページ参照)。なお、特定口座内の利子等又は配当等については、「利子・配当」と記載し、配当所得について申告分離課税を選択する場合には、「配当」の文字を「○」で囲みます。

特定口座年間取引報告書の「⑱納付税額」欄の「源泉徴収税額 (所得税)」の金額を転記します。なお、「⑲還付税額」欄の金額を転記しないようご注意ください。

申告書第二表 (下部)

配当に関する住民税の特例	円	非居住者の特例	円
配当割額控除額		株式等譲渡所得割額控除額	

参考事項 2

【配当割額控除額】 【株式等譲渡所得割額控除額】 等について

平成29年中に道府県民税配当割額（5%の税率）が特別徴収されたいわゆる特定配当等の額及び道府県民税株式等譲渡所得割額（5%の税率）が特別徴収されたいわゆる特定株式等譲渡所得金額について、①所得税及び復興特別所得税の確定申告をしないで源泉徴収で済ませた場合には、個人住民税についても特別徴収で済ませることとなります^(注)。また、②所得税及び復興特別所得税の確定申告をして所得税及び復興特別所得税の源泉徴収税額の控除や還付を受ける場合には、個人住民税についても特別徴収税額の控除や還付を受けることとなります^(注)ので、所得税及び復興特別所得税の確定申告をした場合は、道府県民税配当割額及び株式等譲渡所得割額を**申告書第二表の「配当割額控除額」欄及び「株式等譲渡所得割額控除額」欄**に書いてください（57ページ **【参考】源泉徴収口座を申告する場合の転記方法**参照）。**これらの場合、国民健康保険料(税)、後期高齢者医療保険料、介護保険料などの額に影響を及ぼす場合がありますので、ご注意ください。**

なお、①の場合、「配偶者控除」、「扶養控除」などを判定する際の「合計所得金額」は、特定配当等及び特定株式等譲渡所得金額を含めずに判定します。

また、②の場合、市区町村が税額を計算した結果、特別徴収税額の還付を受ける場合は、その旨と還付を受けるための手続を市区町村が納税者に通知することになっています。

注 特定配当等の額又は特定株式等譲渡所得金額に係る個人住民税の課税方式について、所得税及び復興特別所得税と異なる課税方式を選択する場合は、別途、個人住民税の申告が必要です。詳しくは、お住まいの市区町村にお問い合わせください。

VI 国外転出時課税制度の概要

平成27年7月1日以後に**国外転出**（国内に住所及び居所を有しないこととなることをいいます。以下同じです。）をする一定の居住者^(注1)が**1億円以上**の対象資産^(注2)を所有等している場合には、その対象資産の含み益に所得税（復興特別所得税を含みます。以下同じです。）が課されます。

国外転出時課税の対象となる方は、所得税の確定申告等の手続を行う必要があります。また、一定の手続をすることで、納税猶予制度や税額を減額するなどの措置を受けることができます。**いずれの減額措置等も国外転出の時までに納税管理人の届出書を所轄税務署に提出**などの手続が**必須**となりますので、ご注意ください。

また、平成27年7月1日以後に**1億円以上**の対象資産を所有等している一定の居住者^(注3)から、**国外に居住する親族等（非居住者）へ、贈与、相続又は遺贈**によりその対象資産の全部又は一部の移転があった場合には、移転があったその対象資産の含み益に所得税が課されます。

注1 原則として国外転出をする日前10年以内において、国内に5年を超えて住所又は居所を有している者をいいます。

注2 対象資産とは、有価証券等、未決済信用取引等又は未決済デリバティブ取引をいいます。

注3 原則として贈与の日又は相続開始の日前10年以内において、国内に5年を超えて住所又は居所を有している贈与者又は被相続人をいいます。

詳しくは、国税庁ホームページ **【www.nta.go.jp】** をご覧いただくか、最寄りの税務署にお尋ねください。

VII 株式等に係る譲渡所得等のその他の特例

以下の株式等に係る譲渡所得等の特例の詳細については、税務署にお尋ねください。《措法：租税特別措置法、所法：所得税法》

1 特定管理株式等が価値を失った場合の株式等に係る譲渡所得等の課税の特例（措法37条の11の2）

特定口座内保管上場株式等（55ページの2(2)参照）であったもの（内国法人の株式又は公社債に限ります。）が、上場株式等に該当しないこととなった日以後、引き続き特定管理株式等として特定管理口座に係る振替口座簿に記載若しくは記録がされ、又は特定管理口座に保管の委託がされている場合

には、株式又は公社債を発行した内国法人に清算終了等の事実が発生した時にその特定管理株式等の譲渡があったものとみなし、その取得価額を上場株式等の譲渡をしたことにより生じた損失の金額とみなして、上場株式等に係る譲渡所得等の金額を計算します。

また、「特定口座内公社債」で、一定の要件を満たすものについても、本特例の適用を受けることができます。

なお、その譲渡損失の金額については、確定申告により、「上場株式等に係る譲渡損失の損益通算及び繰越控除」の特例（52ページ参照）の適用を受けることができます。

2 特定権利行使株式に係る保管の委託等の解約等があった場合のみなし譲渡課税（措法29条の2④）

特定権利行使株式の保管の委託等の解約等により、その全部又は一部の返還又は移転があった場合には、その時点で、その時における価額に相当する金額で譲渡があったものとみなして、一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額を計算します。

3 特定投資株式に係る各種特例（いわゆるエンジェル税制）

(1) 特定投資株式の取得に要した金額の控除の特例（措法37条の13）

特定投資株式を払込みにより取得をした場合には、その年分の一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額の計算については、その計算上**その年中に払込みにより取得した特定投資株式**（その年の12月31日に有するものに限り、以下「控除対象特定株式」といいます。）の**取得に要した金額の合計額**（この特例の適用前の一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び適用前の上場株式等に係る譲渡所得等の金額の合計額を限度とします。）が**控除**されます。

なお、特例適用年の翌年以後の控除対象特定株式と同一銘柄株式1株当たりの取得費は、その同一銘柄株式の特例適用年の12月31日における1株当たりの取得費から特例の適用を受けた金額を12月31日において有するその同一銘柄株式の数で除した金額を控除した金額に調整します（60ページの「**【参考】エンジェル税制の適用を受けた株式の取得費の調整計算**」をご覧ください。）。

(2) 特定投資株式が株式としての価値を失った場合の特例（措法37条の13の2①）

払込みにより取得をした特定投資株式が、上場等の日の前日までの期間内に、清算終了等の事実により**株式としての価値を失ったときは**、その損失はその株式を譲渡したことによる損失とみなして、**一般株式等に係る譲渡所得等の金額を計算**します。

(3) 特定投資株式に係る譲渡損失の損益の計算の特例（措法37条の13の2②）

払込みにより取得をした特定投資株式を上場等の日の前日までの期間内に譲渡したことにより生じた譲渡損失の金額（上記(2)の損失も含みます。）のうち、譲渡した年の一般株式等に係る譲渡所得等の金額の計算上控除しきれない金額は、**その年の上場株式等に係る譲渡所得等の金額の計算上控除**できます。

(4) 特定投資株式に係る譲渡損失の繰越控除の特例（措法37条の13の2⑦）

上記(3)の特例を適用しても、なお控除しきれない譲渡損失の金額は、その年の**翌年以後3年間**にわたり、**一般株式等に係る譲渡所得等の金額及び上場株式等に係る譲渡所得等の金額から繰越控除**できます。

なお、同一年中に「特定投資株式に係る譲渡損失の金額」のほかに「上場株式等に係る譲渡損失の金額」が生じた場合において、上場株式等の譲渡益からは①「特定投資株式に係る譲渡損失の金額」、②「上場株式等に係る譲渡損失の金額」の順で控除します。

(5) 特定投資株式に係る譲渡所得等の課税の特例（平成20年法律第23号による改正前の措法37条の13の3）

平成12年4月1日から平成20年4月30日前までの間に払込みにより取得をした特定投資株式については、その特定投資株式を譲渡した場合に、一定の要件に該当するときはその一般株式等に係る譲渡所得等の金額又は上場株式等に係る譲渡所得等の金額は、その**2分の1に相当する金額**となります。

上記(1)から(5)の特例の適用を受ける場合には、その特例の適用を受けようとする年分の確定申告書に、**特例の適用を受けようとする旨の記載**をし（上記(4)を除きます。）、かつ、**「株式等に係る譲渡所得等の金額の計算明細書（特定権利行使株式分及び特定投資株式分がある場合）」**などの書類を添付する必要があります。添付する書類については、48ページの「**5 株式等に係る譲渡所得等における各種特例の適用に当たって使用する申告書等の種類**」を参照してください。

【参考】エンジェル税制の適用を受けた株式の取得費の調整計算

ここでは、特定投資株式の取得に要した金額の控除の特例（措法37条の13）（59ページの3(1)参照）の適用を受けて取得した株式の取得費の調整計算を説明します。

この特例の適用を受けて取得した株式を譲渡した場合、その取得費の計算は通常の方法（総平均法に準ずる方法）により計算した金額から調整計算をする必要があります。計算例は次のとおりです。

特定新規中小会社が発行した株式を取得した場合の課税の特例（措法41条の19）（61ページの「参考事項4」参照）の適用を受けて取得した株式についても下記の【計算例】と同様の調整計算が必要となります。この場合、下記の【計算例】の①欄は、「特定新規中小会社が発行した株式の取得に要した金額の寄附金控除額の計算明細書」の⑩欄又は⑮欄の金額になります。

【計算例】

① 特例の適用を受けた金額	6,000,000 円
② 平成29年12月31日において有する同一銘柄株式の株数	3 株
③ この特例を適用しないものとした場合の、平成29年12月31日の取得費の金額（単価）	3,500,000 円
④ 取得費の調整の際に控除する金額（①／②）	2,000,000 円
⑤ 調整後の取得費の金額（単価）（③－④）	1,500,000 円

「株式等に係る譲渡所得等の金額の計算明細書」の⑩欄の「一般株式等」及び「上場株式等」の合計額を記載します。

特例の適用をしないで総平均法に準ずる方法により計算した、平成29年12月31日現在の取得費の金額を記載します。

平成30年以後にこの銘柄の株式を譲渡する場合の取得費の金額となります。

参考事項 4

【特定新規中小会社が発行した株式を取得した場合の課税の特例（措法41条の19）】

中小企業等経営強化法に規定する特定新規中小企業者に該当する株式会社（その設立の日以後の期間が1年未満のもの等、一定の株式会社に限ります。）などにより発行される株式を払込みにより取得した場合には、その株式の取得に要した金額（1,000万円を限度とします。）について、寄附金控除の規定を適用することができます。

- 注1) 本特例の規定の適用を受けた株式及びその株式と同一銘柄の株式で、その適用を受けた年中に払込みにより取得をしたものについては、特定投資株式の取得に要した金額の控除の特例（措法37条の13）（59ページ参照）の規定は適用されません。
- 注2) 特定新規中小企業者に該当する株式会社などに出資した金額のうち、本特例の適用を受けて総所得金額等から控除した金額は、取得したその会社の株式の取得価額から控除されます（60ページの「【参考】エンジェル税制の適用を受けた株式の取得費の調整計算」をご覧ください。）。

参考事項 5

【割引債の差益金額に係る源泉徴収等の特例（措法41条の12の2）】

平成28年1月1日以後に支払を受ける割引債（償還差益について発行時に源泉徴収されたものや特定口座に受け入れられているものなどを除きます。）の償還金については、その償還金に係る差益金額に対して、償還時に、所得税及び復興特別所得税15.315%（他に住民税5%）が源泉徴収され、株式等に係る譲渡所得等のみなし譲渡課税（47ページの4参照）の対象とされます。

なお、特定割引債（割引債のうち上場株式等に該当するものをいいます。）の償還については、その償還金の支払者から「特定割引債の償還金の支払通知書」が交付されますので、申告にあたっては、確定申告書に添付する必要があります。

また、申告にあたって、特別徴収された住民税の額は、申告書第二表の「配当割額控除額」欄に記載します。

参考事項 3

【特定権利行使株式（いわゆるストック・オプション税制の適用を受けて取得した株式）】

特定の取締役等が受ける新株予約権等の行使による株式の取得に係る経済的利益の非課税等の特例（措法29条の2）の適用を受けて取得した株式をいいます。

【特定投資株式】

特定投資株式とは次のものをいいます。

- イ 中小企業等経営強化法に規定する特定新規中小企業者に該当する株式会社の発行する株式
- ロ 内国法人のうち、その設立の日以後10年を経過していない中小企業者に該当する一定の株式会社により発行される株式で、一定の投資事業有限責任組合契約に従って取得されるもの
- ハ 内国法人のうち、認可金融商品取引業協会の規則においてその事業の成長発展が見込まれるものとして指定を受けている株式（いわゆるグリーンシート銘柄の一部）を発行する株式会社であって、その設立の日以後10年を経過していない中小企業者に該当する一定のものにより発行される株式で、金融商品取引業者（第一種金融商品取引業を行う者に限ります。）を通じて取得されるもの
- ニ 内国法人のうち、地域再生法に規定する認定地域再生計画に記載されている一定の特定地域再生事業を行う株式会社（平成28年3月31日までに同法の確認を受けたものに限ります。）で、一定の要件を満たすものの発行する株式であってその確認を受けた日から同日以後3年を経過する日までの間に発行されるもの
- ※ 上記ニについては、平成28年3月31日までに払込みにより取得をした株式が対象となります。
- ホ 内国法人のうち、沖縄振興特別措置法に規定する指定会社（平成26年4月1日から平成31年3月31日までに同法の指定を受けたものに限ります。）の発行する株式

4 株式交換等に係る課税の特例（所法57条の4）

- (1) 居住者が、その有する株式（以下「旧株」といいます。）につき、その旧株を発行した法人の行った株式交換又は株式移転（株式交換完全親法人の株式若しくは出資又は株式移転完全親法人の株式以外の資産が交付されなかった場合など一定の場合に限ります。）によりその株式交換完全親法人又はその株式移転完全親法人に対しその旧株の譲渡をし、かつ、その株式交換完全親法人若しくはその株式移転完全親法人の株式の交付を受けた場合又は適格株式交換等（一定の要件を満たす株式交換で、その旧株の株主に株式交換完全親法人の株式その他の資産が交付されないものに限ります。）によりその旧株を有しないこととなった場合など一定の場合には、その旧株の譲渡はなかったものとみなされます。
- (2) 居住者が、次の①から⑥までに掲げる有価証券をそれぞれ①から⑥までに掲げる事由により譲渡をし、かつ、その事由により取得をする法人の株式又は新株予約権の交付を受けた場合など一定の場合には、これらの有価証券の譲渡はなかったものとみなされます。
- ① 取得請求権付株式 請求権の行使
 - ② 取得条項付株式 取得事由の発生
 - ③ 全部取得条項付種類株式 取得決議
 - ④ 新株予約権付社債についての社債 新株予約権の行使
 - ⑤ 取得条項付新株予約権 取得事由の発生
 - ⑥ 取得条項付新株予約権が付された新株予約権付社債 取得事由の発生

5 保証債務を履行するために株式等を譲渡した場合で、その保証債務の主たる債務者などに対する求償権の行使ができなくなった場合の特例（所法64条②）

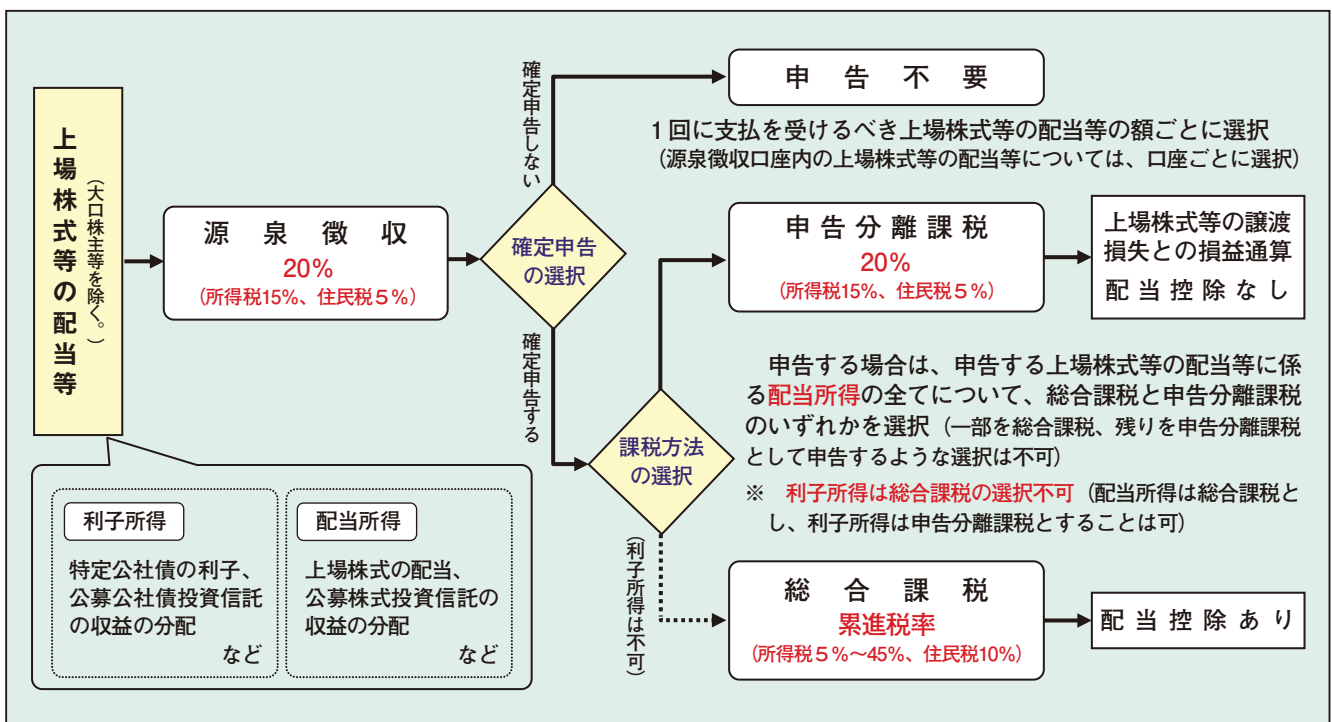
保証債務を履行するために株式等を譲渡した場合で、主たる債務者に対し求償権の行使ができなくなった場合には、求償権の行使ができなくなった金額に対応する部分の金額は、一般株式等に係る譲渡所得の金額又は上場株式等に係る譲渡所得の金額の計算上なかったものとされます。

6 相続財産を譲渡した場合の相続税額の取得費加算の特例（措法39条）

相続又は遺贈により取得した株式等を、相続の開始のあった日の翌日から相続税の申告書の提出期限の翌日以後3年を経過する日までに譲渡した場合には、その相続税額のうち譲渡した株式等に対応する金額を、譲渡した一般株式等の譲渡所得の金額又は上場株式等の譲渡所得の金額の計算上取得費に加算します。

VIII 上場株式等の配当等の課税関係

上場株式等の配当等に係る利子所得及び配当所得の申告等については、①申告不要とする方法、②申告分離課税により申告する方法、③「上場株式等の配当等に係る配当所得」^(注1)については総合課税とし、「それ以外のもの（利子所得）」については申告分離課税により申告する方法に大別され、これを図にすると次のとおりとなります。また、57ページ【注意】も併せてご確認ください。



(注1) 上場株式等の配当等のうち、特定目的信託（その信託契約の締結時において原委託者が有する社債的受益権の募集が一定の公募により行われたものに限り）の社債的受益権の剰余金の配当など一定のものに係る配当所得は総合課税を選択することはできません。

(注2) 「特定口座年間取引報告書」の「特定上場株式等の配当等」の⑨欄の金額は「総合課税」と「申告分離課税」のいずれかを選択できますが、「上記以外のもの」の⑮欄の金額は「総合課税」の選択はできません。

(注3) 所得税のほかに、復興特別所得税が課されます。